いたちかわらばん

通刊66号　鼬川・独川 / 河原番・瓦版　'14夏号

【版画　宗森英夫】　【上耕地橋下流右岸休憩所】

梅雨時の散歩とタマアジサイ

今年、関東地方は6月5日に梅雨入りしました。最近のお天気は気温の急変があったりして驚かされることも多いです。6月初めには北海道でも気温37度の日があったり、一日の最低と最高の気温差が28度にもなったところがあったとニュースが伝えていました。川はお天気との関わりが流量にすぐ現れるので、散歩しながら観察をしている人も多く、特に梅雨の時期には水量が豊富で、岸辺の草や花木の成長も早いので、川をのぞきながら歩くのが楽しみな季節でもあります。

雨に映える花の代表はアジサイ。いたち川周辺でもガクアジサイ、ヤマアジサイ、タマアジサイなどいろいろな種類が見られます。古くは「万葉集」にも「味狭藍」、「安治佐為」と記され、長い歴史の中で種類が増えていきました。最近では、海外で品種改良されたものが園芸種として逆輸入され、アジサイの名所も多いです。いたち川の散歩で是非足を止めて見てほしいのはタマアジサイ。湿った斜面に自生していて6月頃からゴルフボールのような白い蕾を保っていて、7月8月になってやっとアジサイらしい花が見られます。20年程前にはかなりあったのが河川改修や整地でなくなりつつあるので、是非見ておいてほしいと思います。

（うぐいす）

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です

いたち川右支川水辺愛護会について

源流は瀬上池から区役所うらのいたち川との合流点までの細い水路、昔は猿田川と呼ばれていた。右支川（みぎしせん）なんと風情のない川の名。田んぼに取水するための堰の跡が多く見られる。6月１０日ごろ、ホタルが人を寄せる。カルガモの母子も５～１２羽のひよこがかわゆいよ。住宅街を流れる川にはぽい捨てが多い。しかし雨が降ると９９％江の島の片瀬西浜海岸沖へと消える。沖はビニールなどのごみが何１０年も浮遊。１５人の会員は月１回ごみ拾い。それとは別に天気予報の雨の前日にもごみ拾い。距離が２ｋｍもあるので良い運動にはなる。会員は減ってもなかなか増えてこないもんだね。

１人でもごみ拾いが出来る、ごみ拾い専用の道具を考案して、黙々と暑さにも寒さにもかかわらず、ごみ拾いをして楽しむ。しかし路上から４.３ｍの長竿でやるので通行人にはご迷惑をかける。竿が人に当たらないよう細心の注意を払って拾わさせていただく。

そのほか、間知石からの雑木、川沿いの雑草の刈り取りをやってスッキリ水を流す。イベントとして筏作り、おわんの舟作り、花づくりをして楽しんでおります。

（いたち川右支川水辺愛護会会長　岡　力（つとむ））

お花を植える岡さん。大いたち橋付近
（いたち川東岸にて撮影：うめおきな 2014 年５月）

７～８月は「いたち川月間」です

栄区では、「いたち川」の魅力をもっと区民の皆さんに知っていただくため、７～８月を「いたち川月間」として、水辺のイベントをＰＲしています。

①となりは森、横浜自然観察の森へ行こう 2014
日　時：7/13(日) 10:00 ～ 12:00 ※ 小雨決行
場　所：長倉公園から横浜自然観察の森へ
問合せ先：長倉町小川アメニティ愛護会（佐藤）
TEL：891-3802

②谷戸の自然観察会
日　時：8/16(土)10:00 ～ 11:30 ※ 雨天中止
場　所：瀬上市民の森

③水辺の生きものさがし
日　時：8/31(日)10:00 ～ 12;00 ※ 雨天中止
場　所：瀬上市民の森
②③問合せ先：瀬上さとやまもりの会（中塚）
segami.satoyama@gmail.com

④第２回いたち川まつり
恒例のいかだ遊びをはじめ、鯉との力くらべや金魚すくいなど楽しいイベントが盛りだくさんです。
日　時：8/24(日) 9:30 ～ 14:30
※ 雨天の場合　8/31(日)
場　所：いたち川小いたち橋付近
問合せ先：いたち川まつり実行委員会（坂元）
TEL：080-5178-7742

「いたち川いかだまつり」（2011 年８月）。岡さん手製のおわんの舟です。いのち綱を大人が支えて安全に。寄稿に合わせ岡さん得意の色鉛筆画をお願いしました。

発行年月 2014年6月
通刊66号

発行：独川 OTASUKE隊　（いたちがわおたすけたい）
OTASUKE隊事務局:栄区役所区政推進課企画調整係　〒247 - 0005　横浜市栄区桂町303 -19
TEL 045 - 894 - 8161　FAX 045 - 895 -2260
栄土木事務所下水道・公園係　〒247 - 0007　横浜市栄区小菅ケ谷 1- 6 -1
TEL 045 - 895 - 14 11　FAX 045 - 895 -1421
（お便り・お問い合わせは こちらまで）

いたち川周辺のトンボ

日本ではトンボと聞くと、川のせせらぎ、虫採りの情景を想い起こし郷愁を感じますが、外国ではトンボの顔が虎に似ていることから、あまり好感をもたれていません。日本では稲の害虫であるウンカ、ヨコバイを捕食することから有益虫としても守られてきました。なかでも、ヤンマ類は空中を力強く飛びながら、ハチやアブのようなどう猛な虫を捕えて食べ、その果敢な行動や前進するのみで後退しないことから、多くの武将は兜や刀の鍔などに紋様として使い、別名「勝ち虫」と呼ばれていたようです。

栄区も昭和40年代以降急激な都市化により、森林や田畑は宅地化され、河川や小川の護岸がコンクリート化されたために自浄作用を失った河川は水質汚濁が進みましたが、昭和60年代に入る頃から、下水道の普及が進むと共に環境復元の意識が高まったことから水質が好転し、いろいろなトンボを確認することができるようになってきました。

わが国に生息するトンボは、200種類にのぼり、成虫の生殖活動の場と、幼虫の生息環境によって、流水域に生息する種と止水域に生息する種に大別されます。流水域にはヤンマ類、ハグロトンボ、カワトンボ類などが、止水域にはイトトンボ類、シオカラトンボ類、アカトンボ類などが生息しています。6月に入ると、市内の小学校のプールを清掃する前に、トンボのヤゴを捕獲して調査しています。すると、約30種のトンボが冬季にはヤゴで越冬していることがわかってきました。代表的なヤゴは、アキアカネ、ノシメトンボ、シオカラトンボ、アジアイトトンボ、ウスバキトンボ、ギンヤンマなどで、天敵のいない露天のプールはトンボにとって楽園で、冬季に8回から10回の脱皮を行い、トンボになる大事な水辺となっています。平成7年に荒井沢市民の森周辺で調査した報告書は、20種類が確認されています。ヤンマ類は幼虫期が1年～2年以上、シオカラトンボは秋季～冬季7か月くらいで1か月くらいは未熟成虫として木陰に生息し、成虫として飛び交うのは4か月くらいと言われています。トンボは種類によって生態は異なりますが、幼虫期間の1番短いものは1か月くらいのウスバキトンボで、1年に何度か生まれ変わっています。ウスバキトンボは温度が15度以下になると死んでしまうのですが、勢力圏拡大のために北上を繰り返しています。3月、4月に沖縄や九州南部をスタートして次第に北上し、途中産卵して親は死にます。北上は親から子に、子から孫へと引き継がれて北海道を越えてサハリンまで飛んでいくと言われています。いたち川付近に到達するのが7月頃で、天高く集団で飛んでいる色の薄いアカトンボは沖縄から来たウスバキトンボです。オツネントンボは名前の通り成虫で冬季を木陰や物置の中で越年することから名前がついています。いたち川周辺で6月から9月に良く見られるトンボは川縁を蝶のように飛び交うハグロトンボで、一時横浜市から絶滅したと言われていましたが10年前にいたち川で生息が確認され、今では何処でも川面を乱舞している姿を見ることができます。川に沿って矢のように一直線に飛ぶオニヤンマやギンヤンマは、子どもたちのあこがれのトンボで、追いかけた人も記憶にあると思います。ほかにも、シオカラ、オオシオカラ、稀にコフキトンボを見ることができます。

区役所裏の右支川上流部の木陰には、尾の一部が黄色（オス）、または白（メス）で、胴体や尾の先は黒色をしたコシアキトンボを見ることができます。上流部に行くとギンヤンマ、ダビデサナエ、ヒガシカワトンボやムカシトンボを観察することができます。いたち川を散策しながら、一年間を通してトンボの観察をしてみたら、新しい発見があるかもしれません。子どものころに遊んだトンボ採りやトンボ釣りなどを、次世代の子どもにいたち川を散策しながら、一年間を通してトンボの観察をしてみたら、新しい発見があるかもしれません。子どもの頃に遊んだトンボ採りやトンボ釣りなどを、次世代の子どもに伝えたいものです。

（水・人・子）

生息域	種　類	生息域	種　類
流水域	オニヤンマ ミルンヤンマ ダビドサナエ ヤマサナエ ヒガシカワトンボ ＊ハグロトンボ シオヤトンボ	止水域	クロイトトンボ アジアイトトンボ ホソミオツネントンボ クロスジギンヤンマ ギンヤンマ ジョウジョウトンボ シオカラトンボ オオシオカラトンボ アキアカネ ノシメトンボ ウチワヤンマ ＊コフキトンボ ＊印　いたち川で筆者が確認したものを追加しました
止水域	ウスバキトンボ コシアキトンボ ナツアカネ マユタテアカネ ＊ヤブヤンマ		

オニヤンマ

シオカラトンボ

ショウジョウトンボ

ハグロトンボ

ウスバキトンボ

ハンゲショウ（半夏生）

いたち川の「稲荷森の水辺」の散策路には約100mにわたってハンゲショウが植えられています。水辺に群生する多年草で、ドクダミ科であるため臭気があり、茎は高さ60～100㎝で直立し、葉は卵心形で5～10㎝頂点部の葉が白色に変色し、その時期が過ぎると色は元の色にもどっていきます。半夏生とは、暦で言うと夏至から数えて11日目を言います。今年の夏至は昨年と同じ6月21日ですから、7月2日が半夏生で、10日頃までに鑑賞するのが良いと思われます。濃い緑の中に純白のドレスをかぶせたような情景は見事なもので、夜でも白く浮かび上がり、葉は遠くから見ると白い浴衣を着た幽霊のようだとも言われています。また、7月2日は雨が多い時期で、稲が大地にしっかり根付くよう願ってこの日を「タコの日」と定め、それまでに田植えを終わらせ、「タコ」を食べて夏にむかって体力を付ける習慣があります。

名前の由来は、暦の「半夏生」と、葉の色が半分変わることから「半化粧」、生薬の半夏（カラスビシャク）と開花時期が同じであることから、など諸説があります。

（水・人・子）

狐の嫁入り

夜が更ける頃、戸塚や大船、それに弘明寺の方から小菅ヶ谷へ帰ってくると、笠間から岩瀬、そして公田の森にかけて、よく狐火が見えました。それ、あれが『狐の嫁入り』ってやつだあな。あっちの山の男狐が、こっちの山の女狐を嫁さんにもらってよ…。ありゃ、行列つくって、その帰りだな…」おじいさんに、こんな話を聞かされる、子供たちはすっかり信じ込みました。そして、怖いけれどよけいに見たくなっておじいさんの後ろにかくれるようにしながら、その光の列をながめたものでした。（注1）

このような民話や伝説は全国至るところにある。「狐の嫁入り」を調べてみると二つの解釈が出てくる。その一つが上記のような話であり、もう一つは「日が照っているのに雨の降る天気。お天気雨」というものだ。これは広辞苑でも大辞林でも同じだ。「狐の嫁入り」は「狐火」現象として説明されることが多い。即ち、狐火が多く連なって嫁入り行列の提灯のように見えるというものだ。

狐火をひもとくと、狐の口から出るという冬から春先にかけての夜間、野原や山間などに多く見られる奇怪な青白い火…とされていて、蕪村の有名な句、『狐火や髑髏（どくろ）に雨のたまる夜に』が紹介されている。昨今、祭に仕立てられて観光客を集めているのもあり、テレビで紹介されるものとしては新潟県東蒲原郡阿賀町で春先に催されるものが有名だ。また、ある人は、黒沢明監督のオムニバス映画「夢」の中のシーンを思い出すかも知れない。

（ピンテール）

（注1）「本郷の民話と伝説（本郷郷土史研究会）」の中の「狐の嫁入り（小菅ヶ谷）」から抜粋した。